

シリーズ「^{たぶんかきょうせい}多文化共生と^{ちい}小さな^{せかいとし}世界都市を^{かた}語るシンポジウム」記録

2回目 ^{かいめ} 2回目 テーマ「^{しみん}市民が^{かんが}考える、^{ちいき}地域コミュニティ・^{たぶんかきょうせい}多文化共生」

H29.10.29 13:30~16:00

於：飯田市役所3階会議室

このシンポジウムはシリーズで開催されており、5月に開催された第1回は「リニア時代と飯田下伊那の人口減少問題を考える」をテーマとし、地元経営者代表、新聞社、飯田市副市長、国際交流協会横田会長の皆さんにより、持続可能な地域づくりに向けた魅力ある飯田市づくりと、外国人労働者の受入などによる人口対策をテーマとした意見交換が行われました。



第2回目となる今回は、外国人住民の定住・移住に向け、市民に何かできるかを考える場として設定しました。

第1部 講演

「交流と学びで創る、ダイバーシティのまちづくり ～多文化共生と『田舎へ還ろう』を結ぶ～」

講師：長野県教育委員会文化財・生涯学習課 企画幹 木下 巨一 氏

▽ 高校生講座カンボジアスタディツアーに見るダイバーシティ

飯田市の公民館が主催しているこの取組は、「ふるさと飯田を学んでものさしとし」「カンボジアという異なる文化のことを学び」「自分たちの生き方・進路を考える」ことをねらいとしています。飯田下伊那の高校に通う高校生が毎年10数人10月から半年間ふるさととカンボジアについて学び、3月に1週間カンボジアを訪問、帰国後2か月間の振り返りを行い6月に報告会を行う、という8か月かけた講座です。

昨年度の講座に参加した高校生たちは6月に行われた報告会で、3つのグループに分かれて、飯田の素敵な大人たちとの出会いと、カンボジアでの経験を重ねて報告してくれました。

「遠山郷」グループは「笑顔の背景」をテーマとし、厳しい自然条件の中で力を合わせて暮らしている遠山郷の人たちと、貧しい暮らしの中で学校に通うことができる幸せを笑顔に表しているカンボジアの子どもたちを結び付けてくれました。

「人形劇」グループは「自立」をテーマとし、伊賀良三日市場分館スリーディマーケットシアター久保田さんの相手を思いやる姿勢と、カンボジアで孤児院

を経営している日本人 メヤス博子さんが孤児たちの自立を支える生き方を重ねて、自立とは、自分自身の考えを持ち行動できることだけでなく、人は一人で生きているのではなく、周りのことをしっかり見ることができることが自立に必要なであるとまとめてくれました。

「和菓子」グループは「幸せ」をテーマとし、おまんじゅうの一二三屋さんがお客さんとのつながりを作りたいと必ずつけてくれるおまけと、親の虐待から逃れて孤児院にいるこの笑顔の背景にはここにいれば安心という信頼関係があることを重ねて、やさしさの心をつなげていくことが幸せをつくることであるとまとめてくれました。

高校生たちは、飯田の素敵な大人たちからの学びと、カンボジアという異なる国での学びの中から、違いや共通点を探し、さらに参加した 14 人の高校生一人ひとりの異なる視点を重ねることで、より社会の本質に自分の言葉で迫っています。

ダイバーシティが深い学びを実現したという例です。

▽ 日本語教室「DST」の取組みに見るダイバーシティ

飯田市公民館は 1997 年から日本語教室「わいわいサロン」を運営しています。飯田下伊那は満蒙開拓に日本で最も多くの人たちを送り出した歴史があり、そのことにより残留孤児・婦人や 2 世、3 世の皆さんが多く定住されています。飯田市公民館は満蒙開拓の平和学習をきっかけとし、中国帰国者の皆さんが飯田の地で「平和」に暮らすことができるためにこの取組を始めました。現在は中国帰国者だけでなく様々な国籍の方たちが参加されています。

昨年度は新しい試みとして「DST：デジタル・ストーリー・テリング」に取り組んでいます。DST は、学習者自身が自分の紹介したいテーマを選び、テーマに関する写真とともに自分の語りを映像にまとめる学習方法です。

これまでの日本語学習は、支援者が用意した教材を学習者である外国人住民の皆さんが学ぶというスタイルでしたが、DST では、学習者が自分の思いを伝えることを通して、学習者自身の人生観も伝わり、ともに作品を作る支援者が、学習者である外国人住民の生き方や考え方を学ぶ取組です。

今年 2 月に行われた発表会の中でブラジル出身の杉浦麻州男さんは「わたしのすきなこと」として趣味の旅行を紹介してくれました。杉浦さんは発表会で参加者から「一番気に入った旅先は」という質問に対し、「すべて」と答えてくれました。「旅は家を出たところから始まります。仮に目的地の天候が悪くてもそれも旅の思い出の一つ、そういう旅のすべてが私の楽しみ」だそうです。杉浦さんの人柄や人生観までもが伝わってきます。

異なる文化や言葉を背景に生まれ育った人から語ってくれる内容には、私たちが飯田の地で当たり前のように暮らしていると気が付かない、飯田や日本の良さや課題に気づく機会であったり、彼ら彼女らの生き方や考え方を学ぶ機会です。

▽ 飯田市公民館の組織と活動に見るダイバーシティ

飯田市の公民館活動の一番の特徴は、専門委員会や分館活動などに、現役世代の方たちが主役となり、事業の企画や運営に関わっている点にあります。職業、年齢、性別、価値観などの異なる人たちが集い共通のテーマで話し合う公民館活動は、ダイバーシティそのものです。

▽ ダイバーシティで、まちの力を高める

最初に、高校生の育ちの中に、異なる文化との出会いというダイバーシティの経験を通して社会の本質に迫る学びが実現し、そのことが彼ら自身の生きる姿勢にまで影響していったことを紹介しました。

次に日本語教室の実践の中で、学習者である外国人住民の生きてきた文化を通して形成された価値観というダイバーシティから、支援者である日本人スタッフが学んでいることを紹介しました。

ダイバーシティとして典型的なのは多文化や多言語ですが、広くとらえると飯田型公民館の例にあるように、年齢、性別、職業、価値観、障害の有無など異なる立場の人たちが一堂に会して一つの共通した課題に対して考える機会があると、さまざまな角度から発想された意見が交流されることで、課題解決の道筋が豊富に見えてくるということです。

そういう意味でダイバーシティは社会を強くする大事な要素としてとらえることができます。

▽ ハンディを埋めて、ダイバーシティの実を上げる

そういう道筋の延長に、飯田市が進めようという「田舎へ還ろう」をとらえてみるという視点が大事です。

「田舎へ還ろう」というのは、1ターンに限らず、この飯田の地で暮らしてみようという人たちを広く求めていこうという政策です。従って外国人住民の方たちもその対象となります。

しかし、外国人住民の方たちが飯田で暮らしていくうえでのハンディは、言葉の問題だけでなく、職業の選択、福祉や医療制度の利活用などの現場などに多く存在しています。

社会を強くするダイバーシティを実現していくパートナーとして多文化多言語で生まれ育った方たちが十分な力を発揮できるためには、そういうハンディを埋めていくような備えが必要です。

そして、ダイバーシティな状態を受け止めていく私たちの意識づくりも必要です。

そういうハンディを埋めて、安心してこの地で暮らすことができる環境を作るためには、一方では行政の政策として、他方では市民主体の活動としての広が

りが求められています。

▽ 人口問題から人生問題へ

今年の2月19日に行われた飯田市公民館大会の講師、島根県中山間地域研究センターの藤山浩さんに「人と経済を中山間地域に取り戻そう」というテーマでお話ししていただきました。

その時に一番印象に残ったのは、人口減少問題への対応、といったとき、これを人口という数の問題としてとらえるのではなく、人生問題としてとらえてほしい、とおっしゃっていました。

これは田舎へ還ろうと選択し、この地を選んでこられる方たちは一人ひとりご自分の人生をかけて移住されてきているということを忘れてはならない、ということです。そしてこのことは、人生をかけて飯田後に移住された方たちに対して、私たちはそれをしっかりと受け止める責任がある、ということを忘れてはならないということです。

制度的な備え、そして私たちがその方たちの人生を受け止める備えが、何よりも大事と考えています。

第2部 パネルディスカッション

◎パネリスト

飯田市立丸山小学校 日本語教室担当 賜 美和 氏

(社福) 萱垣会 シルバーハウスゆめの郷 施設長 萱垣 充英 氏

飯田市立病院庶務課 秦 文映 氏

飯田市山本在住 半崎 ひろみ 氏

飯田市山本公民館主事 久保田 晋伍 氏

◎コーディネーター 飯田国際交流推進協会副会長 本田 守彦 氏

本田コーディネーター

飯田国際交流推進協会では今年「多文化共生と小さな世界都市を語るシンポジウム」をシリーズで行っており、今回が2回目。第1回目は人口問題を取り上げた。飯田市の現状を踏まえ、少子高齢化に伴う人口減少に我々市民がどういった意識で将来展望を考えるかという切り口で、多文化共生の立場からパネラーの方にお話しいただいた。本日は「市民が考える、地域コミュニティ・多文化共生」をテーマに、皆さんと語っていききたい。

余談ですが、マツコ・デラックスさんの番組「夜の巷を徘徊する」内で、マツコさんが上野公園で飯田市出身の4人組の男性と出会い、飯田について話す場面があった。マツコさんは男性たちより飯田に詳しく、市田柿、河岸段丘、きれいな山に囲まれている、遠回りのJR線についてなど話し

ていた。まさに飯田のイメージ。

昨日（10/28）、市制施行 80 周年式典が行われ、新たなスタートが切られ、約 10 年後のリニア開通を見据えた新しいビジョンが設定された。飯田市の在り方と私たち地域住民としての生活の仕方を大きく変えていく時になり、準備をしていかなければならない。

我々国際交流推進協会は、言語、宗教、性別、年齢、信条を超えて、ここに住む人々の多文化を受け入れる地域になろうと活動している。今日は、教育言語、就労、医療、地域のコミュニティとしてのかかわりをしている方をお招きし、活躍なさっていることとお話しいただく。

賜さん

- 丸山小学校に勤めているが、他に飯田市には上郷、伊賀良、山本、竜丘、松尾の小学校 6 校と、旭ヶ丘の中学校 1 校に日本語教室がある。県費で外国籍児童支援加配という形で担当がついて活動している。
- 丸山小学校 555 名、そのうち日本語教室在籍 20 名でブラジルが一番多く、その他中国、韓国、フィリピン、日本国籍だが支援が必要な児童が含まれている。通級で来ている児童はその中の 15 名で、この地域では一番人数が多い。
- ほとんどの児童は日本で生まれて生活言語には困らないが、小学校に入学して、日本人と一緒に学習を進めるとなると、子どもたちは大変な思いで毎日生活している。そこで日本語教室では少人数で個別指導したり、教室に TT（チームティーチング）で入って支援をしている。
- 日本語が分からない保護者も多く、お便りや連絡帳は市の通訳サポーターにお願いし、ポルトガル語、タガログ語、中国語の先生に翻訳をしていただき、学校と家庭をつないでいる。
- 日本語教室の先生は各校 1 名。飯田市は通訳の先生が訪問してくださるので、恵まれている。

本田コーディネーター

医療通訳として働いている秦さんに現状をお話しいただきたい。

秦さん

- 市立病院は大規模な総合病院で、外来・入院患者にも対応している。
- 各窓口、病棟からコールがあるたびに飛び回っている。一人で運動会をしているみたい。
- オペ室で患者の立会もする。手術が必要な患者には、担当医師や看護師、薬剤師、麻酔科医師からの説明もあるため、ビデオを流しながら患者と家族に同時通訳する。局所麻酔の場合は手術終了まで立会い、全身麻酔は手術前と麻酔から覚めるときに対応している。
- 入院患者は書類書類がたくさんあるため、日本語能力が足りず読み書きができない方には、記入事項の補助をしている。

- 主治医から家族への注意事項の説明。患者と医師の両方の立場を配慮しながら通訳するため、また通訳スピードの向上のため、日々自分の能力も高めるよう、時間があれば勉強している。
- 患者が不安を感じていたり、イライラしたり、自分の気持ちを抑えられない時は説得したり、慰めたりする。全てはより円滑に業務を進めるため。
- トイレに行く時間もなく、自分一人の体では足りないと感じることも。職員も一丸となって協力してもらい、柔軟な対応のおかげで時間短縮もでき、仕事がスムーズに回る。前任の多田さんが在任中に周りから厚い信頼があったおかげで、私は安心して仕事ができ、やりやすい。今の仕事にとってもやりがいを感じています。私も恥をかかないよう頑張りたいと思う。

本田コーディネーター

市立病院には医療通訳は秦さんひとりで中国語のみという現状。他の言語の場合は日本語のできる友人を連れてくるなどして対応しているそう。

続いて、就労について萱垣さんにお話しいただきたい。

萱垣さん

- 多文化共生のシンポジウムに、なぜ介護の現場の私がいるのか疑問かと思われる。
- 少子高齢化という言葉は良く耳に思うと思うが、生産労働人口や高齢者人口に対して出生率が上がらないということ。つまり高齢者を支える労働者が不足するということになる。
- 介護の人材不足はニュース等のおり。世界人口は増えていが、日本の人口は2016年の調査で初めて減った。ここ飯田市は2005年から人口が減り始めている。
- 飯田市の我々介護業界にはマンパワーが必要。介護福祉士の養成校が、この地域では飯田女子短期大学で定員は40名。しかし学生数は定員の半分。誰が高齢者の生活を支えるのか、飯田市の方だけでは支えきれないとなった時どうするのか。萱垣会では「経済連携協定（EPA）」に基づき外国人介護福祉士候補生を受け入れるようになった。4名のベトナム人を受け入れている。
- EPAは外国人を労働力として受け入れるだけでなく、国際交流・国際貢献を前提に置いているので、日本の介護技術や介護保険制度を学び、日本の介護福祉士資格を取り、将来的にはまた諸外国に戻ってサポートをするという制度。
- 日本の人口は逆三角形、平均年齢46歳、人口1億人。東南アジアには平均年齢が20代の国もあり、経済発展の途中。東南アジアにしても将来的には介護の問題に直面するはず。日本と諸外国が技術と労働力を連

携してサポートし合うことができる。

本田コーディネーター

多様性を享受するというダイバーシティ。企業が性別・年齢・宗教・信条関係なく受け入れ、企業の可能性を高めようという経営戦略から生まれた言葉とも聞いている。そういった意味でも地域の社会福祉法人が外国人を受け入れることによる可能性、国としての将来性、諸外国の可能性等、お互いを高められる制度だと思う。

さて、30年前に日本に来られた半崎さん。生活の様子をお話しいただきたい。

半崎さん

- ・1982年母と一緒に日本に来て、初めは母の実家のある駒ヶ根に住み、その後結婚して30年くらいずっと山本に住んでいる。
- ・山本の良いところは地域の方が一緒に会話をし、国際交流ができるところ。
- ・花の木オープンスクールは山本小学校の子どもたちと国際交流等で触れ合うもの。子どもたちとの餃子作りや、フィリピンの方とバンブーダンスを楽しんだりしている。子どもたちの笑顔がとても良い。

本田コーディネーター

30年前というと日本はバブル。半崎さんは日本に来たときとても景気が良かったと聞いている。就職もできるし、お給料も良い。良い時代だったという話をした。今は？と聞くと最悪だと。

その半崎さんが生活する山本の公民館主事久保田さんにお話を伺いたい。最近山本公民館がすごい、とよく聞くが、地域としての山本のすごさとは。

久保田さん

- ・最初に山本地区の現状について。9月末で人口は4,850人、外国人住民178人で比率は約3.6%。飯田市の比率（約2%）に比べると、山本は外国人住民が多い。
- ・毎年2月くらいに国際ふれあい交流会を行っている。もとは地域の婦人会が外国人のお嫁さんと一緒に話をしたり文化交流をしていたものを公民館で引き継いだ。半崎さんは中心メンバー。
- ・花の木オープンスクールは地域の方を講師に山本小学校で授業を行うもの。その中の国際交流の部分で、公民館がつなぎ役となり、外国人住民の方が料理やダンスを教えたりして小学生と交流している。

本田コーディネーター

飯田の公民館のパワーは、この地域に住む人たちは感じると思う。

飯田市には2,100人の外国人住民がおり、中国、フィリピン、ブラジ

ルの順。一時期のピークよりは減っていて、特にリーマンショック以降はブラジル人が減っている。やはり「仕事」と「言葉」が大きなキーワードになると思うが、半崎さん、日本で働いていてどうか。

半崎さん

- ・困ったことはやはり日本語が分からないこと。会話ができないと仕事ができない。他の職員の方と会話ができないと誤解されてしまう。私はここまで日本語ができるようになるのに10年かかった。

本田コーディネーター

日本語ができないと、大人も困るし、子どもも困る。

賜さん

- ・子どもたちを見ると、語彙が少ない。家庭では母語でしゃべっている。またインターネットでいろんな国の番組が見られるため日本のテレビを見ない。もちろん新聞もとっていないので活字を目にしない。
- ・自尊心、アイデンティティが低く、自分に自信が持てない子どもが多い。それはやはり周りに良いモデルがないことが原因。木下先生の話にもあったが、魅力ある目標となるような大人に出会い触れ合うことが大事。
- ・日本は地区の活動が多く、支部子ども会のように縦割りで一緒に成長していく機会があるが、そこに入っていくことができない家庭が多い。山本の活動は素晴らしいと思う。家の近くに拠り所となるような場所があるといいと思う。
- ・宿題をやってこないことも問題。宿題の答え合わせなど、今は保護者をお願いすることも多い。外国の親御さんにそれをお願いすることは無理。出来る限りの手助けはしているが、やりきれないのも実情。地域に宿題を教えてくれるようなところがあると良いと思う。親の収入を考えると塾に通わせるのも難しいと思うので、地域で応援してもらえるとありがたい。

本田コーディネーター

教育とは学校、地域、家庭でやるものであり、3つの連携で成り立つ。地域の役割は重要という話であった。親も話せない人が多いでしょうか。

賜さん

- ・長年住んでいても話せず、通訳サポーターを頼りにしている。また長年住んでいるからこそ、母語に翻訳したお便りが読めなくなっていることもある。親子共々日本語母語両方話せなくなってしまう可能性がある。

本田コーディネーター

病院で24時間働いている秦さんは医療用語も覚える。協会でも過去に問診票を多言語(ポル・英・中・韓)で作ったことがある。しかし今市立病院は中国語一人で対応している。秦さん、困っていることは。

秦さん

- 日本と中国との文化の違いによる支障が出てくる。ある患者さんが精密検査の予約をしたが予約日に来ない。その数日後にふらっと来て、「早く診てくれ」と強い口調で言う。約束の大切さを分かっていない。
- ある患者さんは外来に来て、「もっと強い良い薬を出してほしい。中国なら欲しい薬をすぐもらえる」と要求する。日本で生活するなら日本のルールを守らなければと説得したり、なぐさめたりもする。
- 予約診察時間より少しでも待たされると大暴れする人もいる。
- ある患者さんは、自分の子どもを優先してくれと訴えてくる。わが子がかわいいのはどのお母さんも同じで早く診てほしい気持ちは分かるが、順番がある。
- 以上のように、日本に暮らすなら日本のルールで生活しなければならないことを理解してほしい。

本田コーディネーター

日本人にはかかりつけ医がある。飯田のシステムとしては市立病院にいきなり行っても診てもらえないことが多いので、まずはかかりつけ医で診てもらおう。では外国人住民はなぜ市立病院に行くかというところ秦さんがいるから。県外の中国人の方が市立病院に来られることもあるという。秦さんは月に約 200 件通訳をしておられる。これが飯田市の現状、解決していかなければならない問題であると思う。

さて、菅垣さんから外国人の方を労働者として受け入れ、働いてもらっているというお話があった。問題点は、

菅垣さん

- 受入側としてそんなに大きな問題はない。EPA プログラムは大卒で諸外国の看護師の資格を持っていることが原則の条件。日本語教育を受けて日本文化を勉強し、日本語検定試験の N3（日常会話程度）レベルの方が日本に来る。日本に来たあと、さらに研修で介護のことも含め日本文化をさらに学び、その後各事業所、法人に来るという仕組みになっている。
- 私どもはベトナム人を受け入れているが、EPA プログラムは 3 か国（ベトナム、フィリピン、インドネシア）対象となっている。なぜベトナムかというところ気質的に一番日本人に似ているから。仏教国であり、生真面目さがある。
- 仕事上では、多少の言葉の行き違い等はもちろんあるが、一番問題と思うのは、外国人のストレス。我々日本人も働くとストレスがたまるが、友達や家族と過ごすことでリセットすることができる。飯田市に住む外国人の中のベトナム人の割合は非常に低い。そこで彼らのストレス発散のためのプライベートでのお付き合いを、我々がどこまでできるか。4

名しか受け入れておらず、その中でトラブルが起こったとき頼るところが無い。仕事上だけの付き合いになっていないか、心からのサポートができないのではないか、というところが悩み。

本田コーディネーター

特別な例としてお話しいただいたが、企業がマイノリティ、多文化共生という立場で就労の受け入れをするということは、日本が世界で一番遅れていると言う方もいる。外国では、一緒に働くのが当たり前。島国である日本だから、排除する意識もあり、就労がうまくいかない。と言いながらも30年前はいい時代だった。

半崎さん

- ・30年前はいい時代だったと思う。

本田コーディネーター

外国人を受け入れる側の覚悟や意識づくりは、山本では自然にできているのか、歴史があつてのものなのか。

久保田さん

- ・国際ふれあい交流会が始まった当初の思いとしては、外国人住民の暮らしの悩みに関わっていかないと自分たちの生活も成り立っていかないというのが根底にあり、お互いにそういった気持ちを持ち、理解し合おうとしている。

半崎さん

- ・山本の良いところは組合に入ると、一緒に話し合うことができる。言葉が分からないと何もできないが、会話することによって自分も色々でき、友達もできる。静かで平和。

本田コーディネーター

様々な問題点を聞いてきたが、現状打破してこうしてほしいということ、地域の皆さんにしてほしいこと、展望、希望、抱負等があればお話しいただきたい。

賜さん

- ・自分もこの仕事をいつまでできるか分からない。県の加配がいつまで続くかも分からない。3~4年で学校が変わるが、次の学校で日本語教室を持てるかも分からない。そういったことから、この先子どもたちが困らないようにしていかなければと思っているところ。
- ・親御さんの収入が不安定で仕事最優先の中で仕事をしているので、それが子どもたちの経験不足につながると感じる。
- ・家族以外の大人と関わるということの大切さを考えると、公民館活動や上田市の友愛丸子日本語教室(外国籍の大人も子どもも通う日本語教室)の「日本文化たのしく学ぼう」(信毎子ども新聞9月にて紹介)という活動のようなものがあれば、子どもたちの経験不足の解消、目標となる

大人との出会いの場になるのでは。

- ・親御さんが文化の違いを理解していないことが多いので、日本で生きていくために日本の文化を理解しよう、共に頑張るという意識で、地域と保護者が一緒になって子どもを育てていける環境づくりができると良いと思う。

秦さん

- ・24時間対応できるような体制を整えておくことは大変なこと。努力や工夫をしている。物事に妥協する、自分に甘えることが一番怖い。努力が大事。
- ・自分の母国と違うことに戸惑うのは当たり前のこと。しかし生活していくために日本語の勉強をしたり、文化を理解することは自分の為。不自由のない楽しい生活をしてもらいたい。
- ・日本で生活するなら行事にも参加して、社会になじんでほしい。

本田コーディネーター

日本で暮らす術、方法を教えてほしい。

半崎さん

- ・みんなと触れ合うことが一番。コミュニケーションを取ること。言葉が通じないと自分も損をする。外に出ることが勉強になり、会話することが楽しい。

本田コーディネーター

萱垣さんが考える、外国人労働者を含め就労、定住人口を増やすには。

萱垣さん

- ・今日のパネリストの皆さんの声などを小中学校の教育で取り上げてほしい。現在の日本の世界での立ち位置、多文化共生についてなどを子どもたちに伝えていきたい。
- ・国は、技能実習では今まで農業林業のみだったが、来月から介護も加え3年間で1万人送り込む見込み。また新聞によるとコンビニも国に申請するそう。来日する外国人が今後どのように日本で育っていくのかと考えると、受け入れる側も小さいうちから教育を受けていくべきと考える。
- ・昨日(10/28)、飯田市長も飯田未来デザイン2028でグローバリズムということを話していたので、本当に産業でグローバリズムを目指すなら、草の根運動のような地道な努力が必要。

本田コーディネーター

公民館の可能性の話をしていただいたが、山本公民館の今後のチャレンジは。

久保田さん

- ・半崎さんのお話が全て。我々地域の日本人は、こんなにいい場所だから一緒に考えよう、一緒に活動しよう、という捉え方が必要。

- ・人口問題にしても、ただただ都市から人を引っ張ってくるのではなく、我々が考える良い地域づくりに共感してもらえる人に来てもらえるよう、考えていく必要がある。

本田コーディネーター

まだまだお話を伺いたいところではありますが、お時間になりました。

初めに話したマツコ・デラックスさんの言葉、あげていただいた飯田のいいところの他にも、さらに県外の人が飯田のまちのことを話してくださるときに、外国人にやさしい、住むと良い、公民館活動が活発で地域コミュニケーションが良い、というような言葉が聞こえてくるようなまちになることが、我々の多様性、多文化の心を成熟させていく暁となると良い。

我々の活動は始まったばかりではあるが、皆さんから提案いただいたことをコツコツと積み上げていきたい。リニアが開通したから飯田のまちが良くなったということは多分ないと思う。しかしリニアが来るまでに飯田市はこういうまちだと大きく謳うことによって多くの方が飯田市を訪れることがあるかもしれないし、このまちの可能性が広がることもあると思う。

秦さんが市立病院にいるから中国の患者さんが県外からも来るというのは、ひとつのマーケティング戦略ともなる。それが良い悪いは別として、飯田市の差別化、独自の在り方を作っていく可能性を探る部分があると思う。訪れる人にやさしいまちづくり、住む人を受け入れる側の覚悟の成熟が、大切なことではないかと思う。

皆さん今日は知らないことをいろいろ勉強されたと思う。それぞれの立場で、また地域に戻られて、今日的话题を大きく広めていただければありがたい。

シンポジウムは更に回数を重ねていく予定。また是非ご参加いただきたいと思います。ありがとうございました。

河原副会長

本日は台風の中お越しいただき、また長時間にわたりシンポジウムにご参加いただきありがとうございました。

所詮人は一人では生きられない。他を認め受け入れそして交流をしていく、これが人間の本能であり、多文化共生の源泉であると思っている。

私どもがこの地域で目指している多文化共生というのは一朝一夕ではできない。リニアや豊かな自然もさることながら、飯田市民の心根の優しい住民性がこれからの原動力になると思う。

本日は県の教育委員会から木下先生をお迎えし多文化共生に関する

様々な高校生や公民館、地域活動の実践の話をいただき、また多様性の受入れについてお話しいただいた。パネルディスカッションにおいても、この地の教育、医療、就労の現場の体験から報告、提案をいただき、有意義な時間を過ごすことができた。今後を活かしてまいります。ご登壇いただいた皆様に改めて御礼申し上げます。

我々は「多文化共生」と「小さな世界都市」の、この地域の定着に向け鋭意取り組んでまいります。皆様方の変わらぬご協力をお願いいたします。ありがとうございました。